

令和 5 年 5 月 2 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K03338

研究課題名(和文) 画家、彫刻家、音楽家、舞踊家の「自我のための退行」の有り様の違いについて

研究課題名(英文) Differences in the nature of "regression in the service of the ego" among painters, sculptors, musicians, and dancers

研究代表者

伊藤 俊樹 (Ito, Toshiki)

神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：40288759

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ジャンルの異なる芸術家の「自我のための退行」の有り様がどのように違うかを検討するために、ロールシャッハ法を用いて、芸術家3群の「自我のための退行」の有り様の違いを探った。抽象彫刻家は、舞台美術家と比べて、色彩の象徴的使用、象徴的使用の合計、一次的過程式の合計において、多くの反応を産出した。また、コンテンポラリーダンサーは、舞台美術家よりも、イメージの合成においてより多くの反応を産出した。舞台美術家は脚本や演出による制約を受けるために、思うままに退行することができず、現実の制約を受けない抽象彫刻家やコンテンポラリーダンサーはより自由に「自我のための退行」が可能であったと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の目的は、今まで検討されてこなかった異なる芸術のジャンル間で「自我のための退行」のあり様がどのように違うかを検討した点で学術的意義をもつものである。本研究は、ロールシャッハ法の今後の展開に学術的発展をもたらす先駆的研究となることに独自性・創造性があると言える。更に、本研究成果が芸術学、教育学などの他分野の学問の発展に寄与する事が期待される。

研究成果の概要(英文)：This study used the Rorschach method to explore the differences in the nature of "regression in the service of the ego" among three groups of artists, in order to examine how the nature of "regression for the ego" differs among artists of different genres. Abstract sculptors produced more responses in symbolic use of color, total symbolic use, and total primary process equations than did stage artists. Contemporary dancers also produced more responses in the synthesis of images than did stage designers. It is thought that the stage designers were unable to regress as they wished because of the restrictions imposed by the script and direction, while the abstract sculptors and contemporary dancers, who were not constrained by reality, were able to "regress for the ego" more freely.

研究分野：臨床心理学

キーワード：自我のための退行 ロールシャッハ法 芸術家

1. 研究開始当初の背景

Freud,S.(1922)は、『精神分析入門』の中で、芸術家のこころのありように触れている。芸術家は、あまりにも強い本能的欲求に駆り立てられているが、これらを満足させ得る現実的手段が欠けているため、現実を見捨ててその関心のすべてを空想生活の中で願望充足しようとする。ひょっとするとこの道は神経症に通じているかもしれない、芸術家たちが、神経症によってその才能が障害を受けているのは周知のごとくであり、おそらく彼等の体質は、葛藤を生産的なものへと昇華する強い能力と、葛藤を抑圧する『抑圧の一定の弱さ(Lockerheit)』とを含んでいる、とのことである。Freud,S.は、芸術家の抑圧の弱さを、神経症者と共通の特徴として述べ、自我の弱さの表れとしてみている。英訳では、この "Lockerheit" が "flexibility" (柔軟性) という言葉に置き換えられており、Kris,E.(1952)は、この抑圧の柔軟性という概念を積極的にとりあげ、創造的な、自我の強さを示すあり方としてとらえ直した。そして、この抑圧の柔軟性が条件となって意識レベルから無意識レベルへの「自我のための退行(regression in the service of the ego:以下 RISE と略)」が生じるとした。つまり、Kris,E.は芸術家の心理を、その葛藤のパターンに結び付けずに、創造性への新しいアプローチを見出したのである。RISE とは、創作中に芸術家はコントロールしながら意識から無意識の世界へ入っていき、無意識の中にあるイメージ・シンボルをつかんでくるという考え方である。

更に Schafer,R.(1958)は、インクのしみが何に見えるかを問うロールシャッハ法の反応の中に、被験者の退行の有りが如実に表れるとして、ロールシャッハ法を用いて RISE を実証的に測定する道を開いた。そして、RISE を測定するためのロールシャッハ法独自のスコアリングシステムを考え出したのが、Holt,R.(1977)である。彼は、Freud,S.の言う意識レベルの現実的、論理的な思考が働く二次過程と、無意識レベルの非現実的、非論理的な思考が働く一次過程を測定するカテゴリーを考え、1)内容面の一次過程と二次過程、2)形式面での一次過程と二次過程、3)コントロールと防衛、の三つを強調した。1)は衝動の内容を指し、衝動が生に表れているほど、一次過程寄りだと判断することになる。内容面のカテゴリーはそこに表されている衝動に応じて、性的衝動、攻撃的衝動の二つに分類される。衝動が生そのまま出される場合は一次過程と密接にかかわり、より無意識レベル寄りだと考えられる。一方、修正され受け入れやすい形で出される場合は、二次過程と密接にかかわり、より意識レベル寄りだと考えられる。2)は、思考の形式を指す。反応に示された思考形式が、二次過程を特徴づける、現実的、論理的思考とどれだけ離れているかを測定する。つまり、その反応に示されている思考プロセスが現実との経験に根ざした秩序だった論理的思考とどれだけ離れているか、どれだけ夢のなかのような象徴化等がそこで生じているか、が重要になる。そのような象徴化等が生じているほど、一次過程寄り、すなわち無意識レベルよりということになる。形式面のカテゴリーは、圧縮、置き換え、象徴反応、矛盾反応、言語表現、その他の知覚や思考の歪み、の六つに分かれ、それぞれサブカテゴリーがあり、より一次過程寄りか、二次過程寄りかを判定することになる。また、退行が自我のための適応的なものになるためには、3)のコントロールと防衛という要因が大事になってくる。一次過程、二次過程の評価をするときには、被験者の反応に対する態度(快、不快など)と、思考に含まれる一次過程に支配される程度、あるいはそれを支配、防衛する程度が問題になってくる。そして、コントロールの一番大きな要因はインクのしみの現実的形態をいかに正確に捉えているかを測定する形態水準である。

Holt が RISE 測定のためのスコアリングシステムを作ったことによって、芸術家の RISE に関する実証的な研究が盛んに行われるようになった。一般人と芸術家との比較、才能ある芸術家とそうでない芸術家との比較、統合失調症患者との比較、美大生と一般大学生との比較、などであり、様々な芸術家の RISE に関する研究が行われるようになった。取り上げられた芸術家は、画家、作家、詩人、建築家とさまざまであるが、ジャンルが違う芸術家同士の間の RISE のありようの違いを研究した研究は皆無である。わずかに筆者(2018)が行った抽象画家と具象画家の RISE のありようの違いを調べた研究があるのみである。しかし、この研究も同じ絵画というジャンルでのスタイルの違いの研究であり、芸術のジャンルの違いそのものの研究ではない。

著者の抽象画家と具象画家との RISE の比較研究では、イメージの凝縮、イメージとの関与、自閉的明細化(画家本人にしか了解できないような詳しい説明を反応に対してすること)、象徴化で有意に、抽象画家の方が多という結果が出た。同じ画家であっても、描画スタイルが違うことによって RISE のありように違いが出たということによって、芸術のジャンルが違うことによって、RISE のありようが違うことが予測される。今まで、一般的に芸術家は RISE しやすと言われてきたが、ジャンルが違うことによって、どのように RISE のありようが違うかについては全く検討されてこなかった。本研究は、芸術のジャンルが違うことによって、RISE のありようが違うことを実証的に明らかにし、今までひとまとめにされてきた芸術家の創造プロセスのありようを、より個別的に、より詳細に明らかにすることを目指した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、今まで検討されていなかったジャンルの異なる芸術家の RISE のありよう

がどのように違うかを検討することである。対象としては、舞台美術家、彫刻家、身体表現者、を取り上げたい。彫刻家は画家と異なり、作品が三次元である点、制作により身体を使う点、素材と身体的接触を行う点で画家と大きく異なる。また身体表現者は、具体的な作品を作らず身体で表現することで制作する時間的芸術である。このように制作プロセスも作品の形態も違う3つの芸術のジャンルでは、当然、RISEのありようも異なるはずである。本研究ではその違いを探索的に研究することを目的とする。

3. 研究の方法

・被験者（いずれの分野でも「才能がある」と評価されている芸術家を対象とする）

抽象彫刻家 10名 コンテンポラリーダンサー 10名 舞台美術家 10名

・手続き

1. ロールシャッハ法の施行

各群の芸術家一人一人に対して、ロールシャッハ法をKlopper法(1954、1956)に基づき実施する。

2. 創作に関するインタビュー

各群の芸術家一人一人に対して、最近の作品を見せてもらいながら、芸術家の創作プロセスを探る為に、以下のテーマに関して半構造化面接を行う。最近の代表作ができるまでの詳しい創作プロセス。進行中の作品についての詳しい創作プロセス。

3. 退行の指標の設定とそのスコアリング

1. のロールシャッハ法の結果を、Holt, R. (1977) に従い、各群の反応から内容面・形式面の一次過程よりの反応を選び出し、その数を退行の指標として、反応数を算出する。また、コントロールの指標として、一次過程的な反応の形態水準を算出する。

[分析方法]

1. まず各群で、一次過程寄りの反応の総数及び、サブカテゴリーの数の比較を一元配置の分散分析により行い、数量的な違いを比較し、各ジャンル毎のRISEの特徴を検討する。

2. 各群からその特徴を代表的に表す事例を取り上げ、インタビューからロールシャッハ法のRISEの有り様と作品との関連を検討し、各ジャンルの芸術家間のRISEの比較を行う。

4. 研究成果

[量的研究]

量的研究においては、芸術家群を独立変数、各種の一次過程的反応数を従属変数とした一元配置の分散分析を行い、各群間の差を検討した。その結果、抽象彫刻家は、舞台美術家と比べて、色彩の象徴的使用、象徴的使用の合計、一次的過程形式の合計において、多くの反応を産出した。また、コンテンポラリーダンサーは、舞台美術家よりも、イメージの合成においてより多くの反応を産出した。舞台美術家は脚本や演出による制約を受けるために、思うままに退行することができず、現実の制約を受けない抽象彫刻家やコンテンポラリーダンサーはより、自由に「自我のための退行」が可能であったと考えられる。

[事例研究]

先行研究においても、本研究においても、ロールシャッハテスト自体の反応内容が、芸術家の創作のイメージ自体と結びついていることは稀である。本研究では、芸術家のロールシャッハテストと一次過程的反応と作品とが有機的に結びついている珍しい例を取り上げ、ロールシャッハテストに見られる退行の有り様とロールシャッハテストに反映される芸術家のイメージと作品との関係性について考えることにする。

具体的には、日本の有名な抽象彫刻家の岡田健太郎氏を取り上げる。なお、岡田氏のロールシャッハテストの内容、作品、岡田氏自身の名前を公表することに関しては、本人の了解を得ている。

岡田氏は43才の抽象彫刻家であり、主に金属を使った彫刻、立体造形作品を制作している。

岡田氏の作品の特徴は「母性」と「高みと深み」という2つのテーマにあるとすることができる。

「母性」に関して岡田氏は、次のように述べている。「私は石でくるまれたものを作りたいと思っていた。それで、箱状の作品をつくっていた。私は社会から分断されたいという思いがあって、それが子宮回帰、母体回帰の願望につながる。それで、私には女性的、母性的なものを求めるところがある。私は、つつみこまれるような形に魅惑され、そういう形にくるまれたい気持ちがある。それで私はあたたかみのある形がいいと思う。」

また、直近の作品では、岡田氏は、月、電柱、池・湖、小さい山、水を組み合わせた彫刻作品を作った。この作品について岡田氏は次のように述べている。

「箱に穴をあけると、外部とのつながりができると私は思った。ものをミクロにみると網目があって、そこを通過していくものがある。内部と外部は分断されているけど、その間を通過していくものはある。気持ちや感情、視線とか通過して行くものがある。さらに、空気は見えないけれども、存在する。そのように、ないものがあるということを半透明の網目で表せることができる

のではないかと思った。内部と外部は分断されているけれども、本当はつながっているというのを表したかった。この作品は、月と電柱と池・湖、と小さい山があって、水がぼこっと出ている、たれている。月は空の一番高いところにある。水は地下、地中深くにあるイメージ。自分が認識できる限界のところにあるものを5つ組み合わせた。全部がかたまり状になっただけでつながっている。」従って、この作品では、岡田氏が自身で認識できる限りの「高みと深み」を表現したと言える。

また、岡田氏のロールシャッハテストの特徴も、「母性」と「高みと深み」と関わっている。まず、「母性」に関しては、以下のような反応が見られる。

「ぱっと見るとこれは、夜の山か森。そこに洞窟、洞穴がある。枯れた山ではなくて湿り気のある森とか山とかである。そこから森の主みたいなものがこちらに向かって来ているように見える。真ん中の先が女性器に見える。それは、いやらしくはなく、むしろ神秘的。それが山のてっぺんにある。女性の山なのだと思う。(図)」

「これは子宮である。暖かいものから水っぽいものが広がっているように私は感じる。ここに睾丸と乳首があってそこから何か飛び出ている。これは、冷たい海とか、宇宙ではなく、あたたかいものだと私は思う。オレンジ色から私はそのように感じる。それは、温度的な暖かさではなく、心理的な暖かさである。乳首からぶしゅっと何かが出ている。(図)」

「一人の女性を虫や、木や、葉っぱなど、皆がその女性を守っている。彼女は母親的な存在で、周りの自然が集まって、その女性を彩っている。実際に母じゃないけど母性を持った母親的存在。自然の衣装にくるまれている。(図)」などで、性的なものを含んだ母性的な反応が語られている。

また、「高みと深み」に関しては、以下のような反応が見られる。「真ん中の線は、細胞分裂の1回目を表している。真ん中に深いものがあるように見える。洞窟のようなもの。ないけどある。あるけどない。闇のように見える。底なし沼的な無限の時空間があるように見える。(図)」

「ギターネックと本体。皮がべろんと広がってできている。人智を超えたものに見えた。左右対称が神秘的。宇宙的な音。聞いたことがない音が出てきそう。儀式用の楽器。宗教的な感じ。真ん中がへっこんでいる。谷に見える。真ん中が無限に落ち込んでいる。ブラックホールみたくに。そういう楽器にも見える。(図)」

以上のように、限界を超えた空間についての記述が見られ、これは岡田氏の作品のモチーフである「高みと深み」と通じるものであると考えられる。

以上のように、岡田氏の作品のモチーフが、岡田氏のロールシャッハテストにそのまま反映されているが、ただ反映されているのではなく、自閉的明細化、特異な象徴化、プリミティブな性的反応など、多くの一次過程的思考が伴っていることが特徴であり、作品のテーマに関わる反応を算出しながら、退行を示していることも興味深い。

芸術家の創作のモチーフがロールシャッハテストに反映される場合でも、ただ反映されると言うよりも、そこに一次過程的思考が伴い、「自我のための退行」が示されていることが伺われる。

Caldwell, E. (1995). A longitudinal study of self-image and regression in aging architects of varying degrees of creativity. *Dissertation abstracts international B*, 55(7), 3007.

Dudek, S. Z. (1968). Regression and creativity: A comparison of the Rorschach records of successful vs. unsuccessful painters and writers. *Journal of nervous and mental disease*, 147(6), 535-546.

Dudek, S. Z. & Chamberland-Bouhadana, G. (1982). Primary process in creative persons. *Journal of personality assessment*, 46(3), 239-247.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Toshiki Ito
2. 発表標題 Relationship between the images of artistic work and images of Rorschach Test
3. 学会等名 The 32th International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 Toshiki Ito
2. 発表標題 THE DIFFERENCE OF REGRESSION IN THE SERVICE OF THE EGO BETWEEN ABSTRACT PAINTERS AND ABSTRACT SCULPTORS
3. 学会等名 International Society of Rorschach 2022
4. 発表年 2022年～2023年

1. 発表者名 Toshiki Ito
2. 発表標題 Relationship between the images of artistic work and images of Rorschach Test
3. 学会等名 The 32th International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 Toshiki ITO
2. 発表標題 The Difference of the 'Regression in the Service of the Ego Between Art Students and Professional Artists
3. 学会等名 The 10th Asian Conference on Psychology & the Behavioral Sciences (ACP2020) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------